

食ビ通信 vol.2

発行日：2020年9月11日(金)

発行元：摂南大学農学部

食農ビジネス学科

1 小野雅之学科長からのメッセージ



食農ビジネス学科の皆さん、こんにちは。暑かった8月が過ぎ、少しは秋らしい風が吹くようになってきました。

後期の始まりにあたって、食ビ通信 No.2 をお届けします。皆さんが入学しても間もない4月に、私たち教員からのメッセージを届けるために食ビ通信を発行しました。これからも、皆さんやご家族に摂南大学農学部や食農ビジネス学科の様子を伝えるため、春と秋の年2回、発行することにしました。ご家族の方にも、ぜひ読んでいただいて下さい。

さて、前期の授業はほとんどが遠隔授業でした。大学に登校する機会がほとんどなく、大学生活の出端をくじかれた思いもしたことでしょう。そのなかでも、遠隔授業の受講や限られた登校機会を通じて勉学を進めてくれた皆さんを誇らしく思っています。後期は、対面授業、遠隔授業、この両方を組み合わせた授業と、いろいろな方法で授業が行われます。食農ビジネス学科の専門科目は、コロナウイルスへの感染防止に最大限の配慮をしながら、対面授業を取り入れて実施することになります。水曜日と木曜日は毎週登校して授業を受けることになります。対面授業の日に、明るい顔をして登校してくる皆さんの姿が目に見えます。

ところで、「〇〇の秋」とよく言います。食欲、行楽、実り、読書、スポーツ、芸術など、〇〇に入るさまざまな言葉が思い浮かぶことでしょう。皆さん一人ひとり、それぞれの秋を満喫してほしいと思いますが、「勉強の秋」も忘れないようにしましょう。

2 2020 年度前学期の授業を振り返る



◆基礎ゼミ

大学での学びの入り口にあたる科目で、8名程度の学生と教員1名で構成され、前半は「初年次教育ガイド（First Year Study Guide 2020）」の読み込みなど、後半は所属学科が提供するプログラム（後述）に取り組みました。新入年度の前期でもあるため、授業の履修や大学生活を送る上でのアドバイス、学生間の交流を促すことも意識されました。

2020年度はコロナ禍の影響で授業回数が11回となり、新入生はもちろん新設の農学部に着任した教員も、慣れない遠隔システムを通じて試行錯誤と悪戦苦闘の連続でした。

後半に学科が提供したプログラムは、「農学部西側の荒廃竹林や雑木林をどう活用するか」についてのアイデアや取り組みを考え、意見交換し、それをポスターにまとめることでした。ゼロの状態から形のあるものを練り上げていくという、大学本来の学びを提供し

たつもりです。これから学生主導の「まちなか里山プロジェクト」へとへと展開することを期待しています。
(田中樹)

◆大学教養入門



この授業は、受講生にとっても担当教員にとっても初めての試みでした。対面での実施を想定した学習活動をそのままオンラインでやることとなったため、双方にとってはそこそこ高い情報スキルやコミュニケーション能力を要するハードルが高めの授業となったと思います。私自身は、授業の前夜になると眠れないほど毎回緊張していましたが、多くの皆さんが積極的に参加してくれたことにとても励まされました。作業の多い授業でしたが、最後まで一所懸命頑張ってくれた皆さんに拍手を送りたいと思います！
(戴容秦思)

◆食農ビジネス学概論

食農ビジネス学概論」は、「農業経済・経営・政策系」、「食品産業・流通系」、「食農共生・循環型農業系」全12名の食農ビジネス学科の教員によるオムニバス形式による講義でした。

各教員の専門の話をギュッと濃縮した講義内容は、世界や日本における農産物や食品の持続的な生産・流通・消費の実現を目指して、グローバルな視点から

食と農をめぐる様々な社会経済活動の諸課題の発見とその解決の方法をこれから一緒に考えていく第一歩になったのではないのでしょうか。



(中塚華奈)

◆食と農の倫理

この講義では、エシカル消費、食品ロス、食料アクセス問題、地産地消、スローフード、有機農業、アニマルウェルフェア等々、食と農を取り巻く様々な課題とその解決のために実施されているビジネスや政策について学びました。このような授業を実施した理由は、大学生の早い時期に社会への「問題意識」を持ってもらいたいという思いからです。問題意識があれば、大学で学ぶ理由が見えてきます。

また、高校時代とは異なる、大学生らしい学びに近づくことができます。講義を聞いて皆さんは何を感じ、考えましたか。



(谷口葉子)

◆基礎経済学

基礎経済学は、これから農業経済学（食農ビジネス学）を勉強する学生にとって最も基礎になる専門必須科目である。この授業はコロナ禍の状況の中で、リアルタイム形式で行った(12回中11回)。

それは、受講生のネットワーク環境を考慮しつつも、決まった曜日と時間に授業に臨むことが大切だと思ったからである。また、資料・課題提供型の授業が多い中で、同級生も同じ時間にこの授業を受けているという同質感を味わえることを狙い、孤独・孤立にならないでほしかったからである。

幸い、毎回9割以上の受講生が出席し、諸事情により出席できなかった受講生のためには授業映像をアップロードした。教員も学生も初めての経験の中で、とくに受講生は大変な思いで授業を受けたと思う。みんな、よく頑張ってくれた。

後期は授業環境がより改善され、対面授業がもっと増えることに期待したい。みなさんの明るい声と幸せそうな顔が見たい。



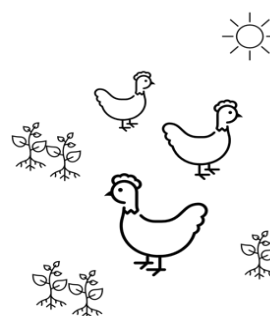
(成瀬政)



問題意識



大学での学び
(知識・理論・スキル)



よりよい解決



3 後学期のカリキュラムの特徴と留意点

後期の専門科目は全て必修です。授業形式については、全て対面授業やオンライン授業のもの、基本的にはオンライン授業で一部対面授業にされるものなど、講義によって異なります。常日頃から必ずポータルサイトや TEAMS などをごまめにチェックする習慣をつけてください。教養科目では、「生命倫理」と「スポーツ科学II」のみが対面授業で、他はすべてオンライン授業となります。

最終的に皆さんがクリアすべき卒業要件は、合計 124 単位以上（必修科目 48 単位以上、選択科目 76 単位以上）ですが、まずは、第 2 年次への進級要件「30 単位以上」が第一関門となります。履修したすべての講義の単位修得を目指して頑張ってください。

（中塚華奈）

◆食農ビジネス学基礎演習 I

必要な情報（データ）を収集し、適切に集計・分析して活用することは、大学生活のみならず、将来の社会人生活においても必要不可欠な能力です。この授業では、主に Excel の基本的な機能を身に付けてもらうために、情報処理演習室でパソコン実習を行います。

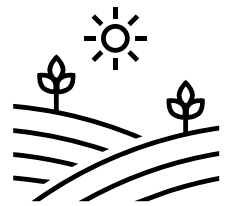
パソコンは苦手だという人もいると思いますが、分からないことがあれば、授業中に遠慮なく、どんどん質問してもらって構いません。4 人の教員で手厚くサポートしますので、安心して授業に参加してください。

パソコンの苦手意識を一緒に克服しよう！



（浦出俊和）

◆食農共生論



共生（きょうせい）」とは、もともと生物学の用語で、異なる種類の生物が互いの良さを活かしあいながら共存して生活していくことを言います（ヤドカリとイソギンチャク、マメ科植物と根粒菌など）。ややもすると私たちは、二つのものを分けて（時には意識的に分断して）考えがちです。女性と男性、障がい者と健常者、黒人と白人…。食（消費者、まち、食卓）と農（生産者、むら、産地）は決して分断されることがないように、多様性を認め合いながら、両者が結びつく道筋を考えていきたいですね。

（北川太一）

4 食住人のよもやま話～学生篇～



音楽が好きで、ベースをしています。大学では「おいしい」について学びたいと思っています。私はおいしいを切り口に人々の生活を豊かに、そしてもっと多くの人に食にわくわくしてほしいです。将来、食に対して多方面からアプローチを行って、多様な「おいしい」を発信して行きたいと考えています。スローフードにも興味があり、学びたいです。

前期の授業は、オンラインでの授業、また課題が思っていたよりも大変な部分が多く、対面での授業を待ち遠しく思いました。夏休みは空いている時間を見つけて資格などの勉強をするつもりです。

（高畠珠美）

趣味はスポーツをすることと音楽を聴くことが好きです。

前期の授業の感想は、毎回課題があったので大変でした。また、オンラインならではの良さを知ることができました。オンラインでは動画を見返すことができるので復習することができ、自分の都合の良い時間に勉強することができました。しかし、危機感がないせいで集中力が続かないことがありました。

夏休みでは期末レポートとアルバイトが中心でした。最近、英語に興味を持ち始めたので TOEIC の勉強も始めようかなと考えています。

(水上巧海)



前期の授業の感想は、対面式授業ができた事をありがたく感じました。活動への取り組みでは、KCAA 学生部会に所属し、大学スポーツを盛り上げるために何が必要なのかを話し合い、今後も様々な取り組みをし、少しでも大学スポーツの良さを伝えられるように頑張ります。

部活動ではアメリカンフットボールに所属しています。未経験でしたが、アメフト部の雰囲気の良いさに魅了され、すぐに入部する事を決めました。また、今年の目標としては、いかに脚を活かす事ができるかを考えながら練習に取り組みたいです。以上で、自己紹介を終わります。ありがとうございました。

(大地悠斗)

KCAA ってなあに？

KCAA 学生部会のメンバーは、様々な形で大学スポーツに関わっている中で、関西の大学スポーツのより明るい未来を一緒に作ってこうという思いで関西の大学を中心としたメンバーが集まっています。

また、私を含め摂南大学から二名、摂南大学院から一名、KCAA 学生部会のメンバーとして参加しています。活動内容としては、関西の大学だけではなく、地方の学生や外部からの講師などを招いた勉強会や、月に一回の定例ミーティングなどを行っています。また、今後は海外の大学スポーツに関する事情を聞いたり、高校生を対象とした大学スポーツの紹介などを実施したりする予定です。

(大地悠斗)



2018 年度シンポジウム (2019.3)

奨励賞の集合写真



学生シンポジウム (2019. 9)



藤林真美先生

大学コンソーシアム KANSAI(KCAA. <https://www.kcaa-jp.org/>)は関西地区の複数大学が連携し、昨今の大学スポーツが抱える問題解決や新しい大学スポーツ延いては関西地区の活性化を目指して 2018 年 4 月に創設しました。摂南生が「大学スポーツ」を共通のテーマに多大学の学生や産官学多業種の社会人と協働し、積極的に価値ある活動をしている姿を見てとても頼もしく、嬉しく思っています。

(食品栄養学科 運動生理学研究室 藤林真美)

5 食ビ住人のよもやま話～教員篇～

◆マスカットによせて

先日、岡山の牡蠣養殖業者の方から、彼女の知り合いの農家が作るマスカットをいただきました。とても美味しくてビックリ！ですが、今年は長雨と猛暑でマスカットが全然甘くならず、例年より遅い時期の収穫になったとのこと。でも、送り主は「もっと前から市場にはたくさんマスカットが出回っていたけど、私は彼女が作るマスカットを贈りたかった。」と言います。

「この人がつくるものがいい」と消費者から信頼される生産者。こういう信頼関係って、とっても大事で素敵だなと思いました。ぜひそんな生産者さんとのつながりを増やしていきたいと思う今日この頃です。



(副島久実)

◆出張の思い出

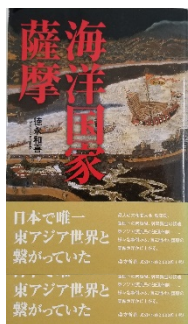
先進国の農業政策の研究に携わってきたので、1997年に調査を行って以来、毎年北米か欧州のどちらかに出張していました。調査では、1日2～3ヶ所を午前と午後の早い時間帯に訪問し、夜の飛行機で次の調査地に移動するというスケジュールが一週間以上続きます。幸いなことに、20年近い経験の中で、9.11同時多発テロ関係や豪雪でフライトが遅れたことはあっても、調査に遅刻したことは一度もありませんでした。ハードな調査日程で名所観光はほとんどできませんでしたが、対応してくれた人々の顔は直ぐに浮かんできます。



(吉井邦恒)

6 おすすめの一冊

①～コンブと富山の薬売りの関係～ 徳永和喜著『海洋国家薩摩』、 南方新社



中学や高校の歴史の授業では必ず江戸時代の鎖国がとり上げられ、薩摩藩(鹿児島)がコンブを密貿易で中国に輸出していたことも教えられる。しかし、コンブは北海道でしかとれない。これを誰がどういう理由で仲介したのか。仲介人は富山の薬売りであった。鹿児島県内で売上を拡大しようとする富山の薬売りに協力しないと販売許可を取り消すと圧力をかけ、コンブを入手していた。読書が長年の疑問を解消してくれた。



(濱田英嗣)

②宮脇俊三著 『時刻表2万キロ』、河出書房



大学1年生の時、私を「乗り鉄」の道へと導いた書。内容は、当時2万キロの営業距離を有していた「国鉄」(この言葉、わかるかな…)の全線に乗るものですが、単なる旅行記ではありません。

一人旅の面白さ、何気ない車窓の風景からの気づき、季節の違いや自分の心の持ちようで旅の印象が異なる不思議さ…“鉄ちゃん”でなくても楽しく読むことができます。



(北川太一)

7 第2回摂大農学セミナーから 「摂南大チャイ・プロジェクト」へ



2020年9月7日、第2回摂大農学セミナーがありました。このセミナーは、研究情報を教員や関心ある内外の人びとと共有するために行われます。今回は、ZOOMを用いた遠隔セミナーでしたが、農学部会場とオンラインを合わせて100名ほどの参加がありました。驚いたのは、数名ですが、高校生の参加者がいたことです。

食農ビジネス学科の一番手として、『摂大農「スパイス・プロジェクト」の提案』という演題で報告しました。今年の3月まで行っていたタンザニアの山間地でのバニラ栽培と加工技術の最適化、バニラの導入による在来屋敷林・樹園地システムの拡充を通じての貧困削減・社会的弱者層支援・生態系保全（アフリカ版里山づくり）を同時に成立させるという取り組みを紹介しました。

次いで、その発展形として、タンザニアの島嶼部ザンジバルで、スパイス生産を軸とするグリーン・インダストリーの形成に向けた学術研究と社会実践、ザンジバル国家大学と摂南大学による教育研究拠点の形成の提案をしました。

同時に、ザンジバルの小農民が生産するスパイス（クローブ、カルダモン、シナモン、バニラなど）と摂南大学周辺の地域資源（例えば、京都府南部の茶）を組み合わせたスパイス・ティー（チャイ）の開発と商品化にも触れました。うまくいけば、アフリカと関西が出会い、「摂南大学グッズ」として世の中に出せるかもしれません。

セミナーの翌日から学内の複数の先生からコンタクトがあり、意見交流が始まりました。学科横断型で地域社会との協働による「摂南大チャイ・プロジェクト」が近々始動しそうな気配です。学生を含めたさまざまな参加者の交流による新たな発想やイノベーションが出されることを期待しています。これから、時々、進捗状況を報告します。



（田中樹）



学科教員の研究室からの眺望

8 編集後記

食ビ通信 No.2 をお届けします。同じ大学・学部・学科・ゼミでも意外に隣人のことは分からないものです。ましてや新型コロナで顔を合わせて話をする機会が激減している中では「内部広報」に力を注ぐべきと考え、このニュースレターを半年に一度のペースで発行することにしました。

1 学年約 100 人の学生+12 名の教員という食ビのかたまりはそれなりの大きさの集団です。身近な友人、先生の活動から刺激を受けたり、新しい発想が浮かぶ——このニュースレターがそのような媒体になることを期待しています。



（編集長＊柳村俊介）